

■抄録

レクチャーシリーズ「ひとはひとと、いかに向き合いうるのか」より

レクチャー 1 「マイノリティとは誰のことかー理論と実践から考える」

講師：山田創平（京都精華大学国際文化学部長・教授）

2024 年 1 月 21 日（日）京都芸術センター・フリースペース

様々な学問の知見を参照しながら他者理解の問題を考えることを目的とした連続レクチャー「ひとはひとと、いかに向き合いうるのか」。第 1 講目では、本連続レクチャーの企画者である山田創平氏（京都精華大学国際文化学部長・教授）がマイノリティ論の基礎について概説した上で、自身の関心や企画意図について語った。

山田氏はまず、マイノリティ論を含む現代思想の基礎に認識論があることを指摘した。認識論とは人間の認識に関する様々な問いを探索する分野で古代ギリシアにはじまり何千年にもわたる蓄積があるが、20 世紀に入りこの認識論は根本的な転換を遂げる。それまでの認識論が人間の認識を所与のもの、あるいは経験から得られるものなどと説明してきたのに対し、20 世紀以降の哲学者たちは人間の認識は言語的に成立していると考えようになった（言語論的転回）。山田氏は一つの例として、言葉をあまり学んでいない子どもが大人に連れられてスーパーマーケットの果物売り場を訪れ、リンゴというものについて初めて説明を受けた時の状況を挙げ、この時子どもの中では「リンゴ」という言葉によってリンゴとそうでないものを分ける線が引かれると説明した。このように言葉とは本来あいまいな世界に線を引き、ものどもの違いを印づける道具であると指摘したのがソーシャルである。山田氏は、ソーシャルの理論を理解する際の勘所は、「先に物事があって言葉が与えられるということではなく、言葉が与えられて物事が生じる」という感覚であると強調する。このように、言葉が与えられることで本来分類のない世界から物事が浮かび

上がってくることを表象代表という。山田氏はリンゴのような物理的な存在だけでなく、「国家」や「女性」「男性」といった抽象的な物事についてもこの表象代表が働くことを指摘した。

ソシュールの記号論のもう一つの要点に、言語の恣意性という考え方がある。これは、ある物事を呼び表す言葉の選択には実は必然性はなく、線引きをすることさえできればどんな言葉でも構わないという発想である。ここから、言葉というものはあいまいな世界に線引きを与える道具、記号であるという考え方が出てくる（記号論）。山田氏は、この考えを推し進めていった先に言語が人間の認識や文化を形作っているとする構造主義や社会構築主義と呼ばれる考え方が生まれたと説明し、そこでは「我々の自己理解、パーソナリティやアイデンティティも言葉でできている」と理解されると語った。



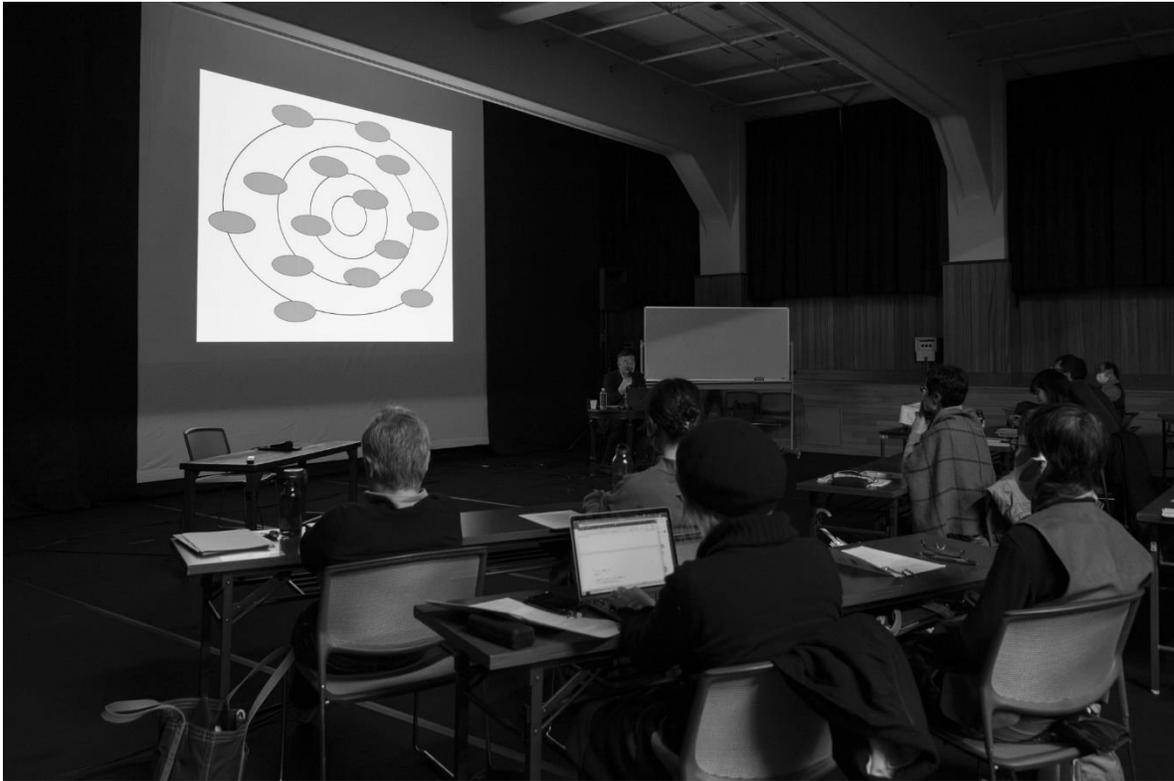
これらの考え方の重要な点を山田氏は二つにまとめる。一つは「社会や社会構造は、言語的に作られたものであり、言語が時代や地域によって異なる以上、すべての社会構造はその時代や地域に特有のローカルで一時的な現象、つまりはつくりもの」という発想

である（反本質主義）。もう一つは、そうだとすると、社会に存在する抑圧や差別、排除の構造もまた言語によるつくりものであるという点である。山田氏はゲイ・バイセクシュアル男性のエイズ予防の現場での体験を振り返りながら、この社会に「差別としか言いようがない」ものが存在するという自身の感覚を語り、差別が言語によって作られるとするなら、そのような言語を生み出している構造とは何なのかを考えなければならぬと続けた。

山田氏は多くの社会学者の共通認識として、現在の差別構造の源に資本主義（資本制）があることを指摘する。近現代社会のほぼ全域を覆う強固な「つくりもの」である資本主義は一体どのようにして成立し、どのような社会構造を生み出したのか。山田氏は資本主義の成り立ちを簡単に振り返りながら、資本主義社会が基本的には人々（主に男性）が会社や工場で働く社会であり、そこでは妻が無償で家事労働を行うことが前提となっていると説明した。妻が家回りの仕事を担うことで夫である労働者の長時間労働が可能になり、資本家はケアに関わるコストの支払いを免れて利益を最大化することができる。また、更なる労働力を再生産するために家庭での子作りが推奨される。このような社会構造は必然的に男性中心主義、異性愛中心主義、婚姻中心主義、健常者中心主義といったイデオロギーと、そこからみ出す人々への差別を内包すると山田氏は強調する。そこでは、資本主義の維持と発展に都合のいい性や家族のあり方が称揚され、逆にその規範に沿わない人々は周縁へと追いやられる。すなわち、既婚で子どものいる異性愛者の男性が社会の中心におり、女性や単身者、障害を持つ人、セクシュアルマイノリティといった人々がより外側に配置されていくという構造である。

このような中心と周縁の構造においては、ある人の位置づけがより周縁に近づくほどその社会ではマイノリティ性を帯びる。さらに山田氏は「周縁のさらに周縁には、辺縁といってもいいと思いますが、表象代表されえない、つまり言葉にすらなっていない、いないことにされている人々が存在するであろうことが理論的に想定できる」と説明した。社会の中心にいる人々はより強固で力のある言葉で表現されるが、周縁に行くほどそこにいる人々についての語りは少なく、また差別的になっていき、さらにはほとんど言葉にし得ないような人々が端にいる。この構造のさらに外部にいる人々については言葉にもなってい

ないので、我々はその存在を認識することさえできない。このような表象にまつわる構造を指摘したスピヴァク言葉を参照しながら、山田氏は現在可視化されている差別問題を認識するのみに留まらず「我々に見えていない人がいるということを常に考えないといけない」と強調した。



続けて山田氏は、今後自身が考えていきたい問いを二つに分けて語った。一つは、中心と周縁という構造をいかに揺るがすかという問いである。山田氏は人間の認識が言語を通じて行われる以上、それは原理的に中心と周縁の形を取り、その構造自体を壊すことはできないとことわった上で、それを揺るがす、ずらすということが肝要であると述べた。こうした問いに取り組むポスト構造主義は、言語による表象代表は確定的なものではないと捉え、言葉に関する語りの体系＝言説に注目する。言葉が常に語られ続け、語られ直されるものだとする、その意味は常に揺れ続け、定まらないことになる。これを踏まえると、マイノリティを表象代表する言葉の運用を変えること、すなわち従来とは異なる言葉の使い方、解釈を行うことで既存の差別構造を揺るがすという可能性が開けてくる。山田氏は

一例として、自身の中高生時代は同性愛者の男性に対して「ホモ」といったネガティブな言葉が使われていたが、当時書店で見かけたゲイ男性向けの雑誌*B a d i*の表紙に「明るいゲイライフ」というフレーズが使われているのを見て「ゲイ」という言葉を知り、さらにそれが「明るい」という言葉と共に使われていたことで認識が変わったという体験を挙げた。山田氏は「もうこれは確定的だろうと、動かないだろうというふうに考えられるすごく重い言葉、社会の構造もしっかりしているように見えるものも、実は動いていますから、それを揺るがして崩していく可能性というのは常に見えてきます」と語り、言葉の変化が社会の変化をもたらす点を強調した。これにつながる形で山田氏は、従来とは違う世界の解釈の仕方を提示する理論としてクィア理論を挙げ、第2講目の菅野氏による講義に期待を示した。また、マックス・ウェーバーの理論を引きながら資本主義の根源にキリスト教があるという可能性を指摘し、これを再解釈し揺らがせる試みとして、第3講目で工藤氏がレクチャーするクィア神学への関心を述べた。

山田氏のもう一つの関心は「より小さな声、聞こえるか聞こえないかわからない声、社会の中でいないことにされている人たちの語りをどういうふうに引き出すのか」という問いである。これに引きつけて山田氏は、人と人が向き合い声を聴くためのアプローチとしてパーソン・センタード・セラピーに関心を持つようになったことを語り、第4講目の中田氏による講義への導線を引いた。最後に山田氏は、一人の個人の内部にも中心と周縁の構造が存在し得ることを指摘し、「私はいままさに他者の声を私自身が聴くと共に、自分の内側にある声ですね、より小さな声もまた聴かねばならないというふうに思っています」と語り、他者や自分自身の声を聴くことが今後マイノリティについて考えるうえで重要になってくるのではないかと締めくくった。

(作成＝吉田守伸、写真＝仲川あい)